

同変 Schubert 計算における組合せ論

京都大学大学院理学研究科数学・数理解析専攻

学籍番号 0530-35-6268

赤松 輝海

はじめに

はじめに

目次

1	同変コホモロジー	3
1.1	Borel 構成	3
1.2	$H_G^*(X)$ の代数的構造	4
1.3	Weil/Cartan モデル	4
1.4	localization theorem	4
2	GKM の定理	5
2.1	equivariantly formality	5
2.2	GKM の定理	5
3	同変 Schubert 計算	6
3.1	Grassmann 多様体の同変コホモロジー	6
3.2	GKM 条件による Schubert Class の特徴づけ	6
3.3	Schubert puzzle による方法	7
3.4	edge labeled tableaux による方法	7
3.5	weight preserving bijection の構成	7

1 同変コホモロジー

1.1 Borel 構成

X を位相空間, G をコンパクト Lie 群とする.

事実 1.1.1. ある主 G 束 $\pi: EG \rightarrow BG$ が存在して, 任意の主 G 束 $E \rightarrow X$ に対してある連続写像 $f: X \rightarrow BG$ があって $E = f^*(EG)$ がなりたつ. さらに EG は弱可縮であり, G は EG に自由に (右から) 作用する.

例 1.1.2. $T = \mathbb{C}^*$ に対して $S^\infty \rightarrow \mathbb{CP}^\infty$ は事実 1.1.1 の主 G 束である.

定義 1.1.3. G が X に左から作用しているとき, G の $X \times EG$ への左作用を

$$g(x, e) := (gx, eg^{-1}) \quad \text{for } g \in G, x \in X, e \in EG$$

によって定める. $X \times_G EG := (X \times EG)/G$ とし, これを X の homotopy quotient という. このとき $H_G^*(X) := H^*(X \times_G EG)$ を X の G 同変コホモロジーという.

例 1.1.4. 1 点集合 pt の G 同変コホモロジーは

$$\text{pt} \times_G EG = (\text{pt} \times EG)/G \approx BG$$

より

$$H_G^*(\text{pt}) \simeq H^*(BG)$$

である. よって

$$H_{C^*}^*(\text{pt}) \simeq H^*(\mathbb{CP}^\infty) \simeq \mathbb{Z}[y]$$

X の G 同変コホモロジーは主 G 束 $EG \rightarrow BG$ の取り方に拠らないことを示そう. 写像 $p: X \times EG \rightarrow X \times_G EG$ と $p_X: X \times_G EG \rightarrow BG$ を

$$\begin{aligned} p(x, e) &:= [x, e] \\ p_X([x, e]) &:= \pi(e) \end{aligned}$$

によって定める.

命題 1.1.5.

- (i) $p: X \times EG \rightarrow X \times_G EG$ は主 G 束である
- (ii) $p_X: X \times_G EG \rightarrow BG$ は X をファイバーとするファイバー束である

Proof. (i) $EG \rightarrow BG$ は主 G 束であるので,

□

連続写像 $f: X \rightarrow Y$ がホモトピー群の同型

$$f_*: \pi_q(X, x) \rightarrow \pi_q(Y, f(x)) \quad \text{for } x \in X, q > 0$$

を誘導するとき, f を弱ホモトピー同値という.

補題 1.1.6. E を弱可縮な G 空間とし、 $P \rightarrow B$ を主 G 束とする。このとき $(E \times P)/G \rightarrow B$ は弱ホモトピー同値である。

Proof. □

定理 1.1.7. M を G 空間, $E \rightarrow B, E' \rightarrow B'$ を主 G 束で E, E' はともに弱可縮であるとする。このとき弱ホモトピー同値 $E \times_G M \rightarrow E' \times_G M$ が存在する

Proof. □

[5] より、次が成り立つ

事実 1.1.8. 弱ホモトピー同値 $f: X \rightarrow Y$ は同型 $f^*: H^*(Y) \rightarrow H^*(X)$ を誘導する

定理 1.1.7 と事実 1.1.8 より, $EG \rightarrow BG, EG' \rightarrow BG'$ が事実 1.1.1 の主 G 束であるとき、

$$H^*(X \times_G EG) \simeq H^*(X \times_G EG')$$

であることがわかる。

1.2 $H_G^*(X)$ の代数的構造

X, Y を G 空間, $f: X \rightarrow Y$ を G 写像とする。 $f_G: X \times_G EG \rightarrow Y \times_G EG$ を

$$f_G([x, e]) = [f(x), e]$$

によって定めると f_G は well-defined な連続写像となる。したがって f_G は同変コホモロジーの準同型

$$f_G^*: H_G^*(Y) \rightarrow H_G^*(X)$$

を誘導する。通常のコホモロジーの関手性と同様、同変コホモロジーも関手性をもつ

命題 1.2.1.

- (i) $(\text{id}_X)_G^* = \text{id}_{H_G^*(X)}$
- (ii) $f: X \rightarrow Y, g: Y \rightarrow Z$ に対して $(g \circ f)_G^* = (f_G^*) \circ (g_G^*)$

任意の G 空間 X に対して、1 点集合 pt への自明な G 写像は、準同型 $H^*(BG) \simeq H_G^*(\text{pt}) \rightarrow H_G^*(X)$ を誘導するから、 $H_G^*(X)$ は $H^*(BG)$ 代数の構造を持つ。

1.3 Weil/Cartan モデル

1.4 localization theorem

2 GKM の定理

2.1 equivariantly formality

2.2 GKM の定理

3 同変 Schubert 計算

3.1 Grassmann 多様体の同変コホモロジー

$\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n) = \{ V \subset \mathbb{C}^n \mid \dim V = k \}$ を Grassmann 多様体という。 $T = \mathbb{C}^n$ とするとき、 T は \mathbb{C}^n に

$$(t_1, \dots, t_n) \cdot (x_1, \dots, x_n) = (t_1 x_1, \dots, t_n x_n)$$

によって左から作用する。この作用は自然に $\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n)$ への作用を誘導し、 $\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n)$ は T 空間となる。 $\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n)$ の T 同変コホモロジーの構造は組み合わせ的に決定することができる。 $\binom{n}{k}$ を 0 と 1 からなる n 文字の文字列のうち、1 が k 個使われている文字列の集合とする。 $\lambda = \lambda_1 \cdots \lambda_n \in \binom{n}{k}$ に対して置換 $\sigma \in \mathfrak{S}_n$ の $\binom{n}{k}$ への作用を $\sigma\lambda = \lambda_{\sigma^{-1}(1)} \cdots \lambda_{\sigma^{-1}(n)}$ で定める。 $\lambda = \lambda_1 \cdots \lambda_n \in \binom{n}{k}$ に対して、

$$\Omega_\lambda = \{ V \in \text{Gr}_k(\mathbb{C}^n) \mid \dim(V \cap F_i) \geq \dim(\mathbb{C}^\lambda \cap F_i), \quad \forall i \in \{1, \dots, n\} \}$$

を Schubert cell という。ここで、 $\mathbb{C}^\lambda = \langle e_{\lambda_1}, \dots, e_{\lambda_n} \rangle$, $F_i = \langle e_{n-i+1}, \dots, e_n \rangle$ である。

$\text{inv}(\lambda) = \{ (i, j) \mid \lambda_i = 1, \lambda_j = 0, i < j \}$ とすると Ω_λ は $\mathbb{C}^{|\text{inv}(\lambda)|}$ に同相であり

$$\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n) = \bigsqcup_{\lambda \in \binom{n}{k}} \Omega_\lambda$$

となる。したがって $H^*(\text{Gr}_k(\mathbb{C}))$ は Ω_λ の定めるホモロジー類の Poincare 双対 S_λ たちで \mathbb{Z} 上生成される。 $\text{Gr}_k(\mathbb{C})$ は equivariantly formal であるから $H_T^*(\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n))$ は $H_T^*(\text{pt}) = \mathbb{Z}[y_1, \dots, y_n]$ 上 S_λ たちで生成される。 S_λ を Schubert class という。

したがって 2 つの Schubert class の積 $S_\lambda S_\mu$ はふたたび $\{S_\nu\}_{\nu \in \binom{n}{k}}$ の $\mathbb{Z}[y_1, \dots, y_n]$ 係数の線形結合

$$S_\lambda S_\mu = \sum_{\nu \in \binom{n}{k}} C_{\lambda\mu}^\nu S_\nu$$

で表すことができ、この時の係数 $C_{\lambda\mu}^\nu$ を計算する組み合わせ的手法を紹介することが本論文の目的である。

3.2 GKM 条件による Schubert Class の特徴づけ

$\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n)$ の T 作用における固定点は $\{\mathbb{C}^\lambda\}_{\lambda \in \binom{n}{k}}$ であるから、[GKM] より $H_T^*(\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n))$ は $\bigoplus_{\lambda \in \binom{n}{k}} H_T^*(\text{pt})$ の部分代数である。GKM の定理を適用するために $\text{Gr}_k(\mathbb{C}^n)$ の T 不変な \mathbb{CP}^1 を計算する。

命題 3.2.1. $\lambda, \mu \in \binom{n}{k}$ に対して \mathbb{C}^λ と \mathbb{C}^μ を結ぶ T 不変な \mathbb{CP}^1 が存在するための必要十分条件は、ある $(i, j) \in \text{inv}(\lambda)$ に対して $\mu = (i, j)\lambda$ となっていることである。

Proof.

□

3.3 Schubert puzzle による方法

1	1	1	1	2	2
2	2	3	3	3	4
3	3	4	5		
5					

3.4 edge labeled tableaux による方法

n の分割 $\lambda = (\lambda_1 \geq \cdots \geq \lambda_k > 0)$ に対して、1 行目に λ_1 個の箱を、2 行目に λ_2 個の箱を、順に k 行目まで左寄せで書いた図を Young 図形という。以降分割と Young 図形を同一視して同じ記号で表す。 λ の各箱に、各行について左から右に狭義単調増大、各列について上から下に広義単調増大となるように数字を書き入れたものを Young tableaux という。

,

1	1	2	2
2	3	3	
3	4	4	
4			

分割 λ, μ に対して、 $\lambda > \mu \Leftrightarrow \lambda_i > \mu_i \forall i$ によって順序を定める。 μ の Young 図形から λ に相当する部分を取り除いた図形を歪 Young 図形といい。 μ/λ で表す。歪 Young 図形の各箱に、各行について左から右に狭義単調増大、各列について上から下に広義単調増大となるように数字を書き入れたものを skew tableaux という。

,

		1	2
		2	
	1	3	
2			

3.5 weight preserving bijection の構成

謝辭

参考文献

- [1] W. Fulton, Young Tableaux: With Applications to Representation Theory and Geometry. Cambridge: Cambridge University Press, (1996).
- [2] L. W. Tu and A. Arabia, Introductory Lectures on Equivariant Cohomology. Princeton University Press, (2020).
- [3] A. Knutson and T. C. Tao, Puzzles and (equivariant) cohomology of Grassmannians, Duke Math. J. **119** (2003), no. 2, 221–260
- [4] H. Thomas and A. T. F. Yong, Equivariant Schubert calculus and jeu de taquin, Ann. Inst. Fourier (Grenoble) **68** (2018), no. 1, 275–318
- [5] Hatcher